

横浜市立あざみ野中学校 学校評価報告書（令和元年度）

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	各教科で指導主事を招いた研究授業・研究協議等を引き続き行い、生徒にとって主体的・対話的な深い学びにつながる授業を行う。また、生徒による授業評価の集計結果をもとに各教科で授業改善を行い、生徒が何が分かり何ができるようになったか実感できる授業を行う。	授業アンケートでは「分かった・できたことが自覚できる」が54%、「ややできる」が36%で合計90%には達しているが、「自覚できる」の割合を高められるよう、「主体的」「対話的」「深い学び」につながる授業をさらに実践していく必要がある。研究授業・研究協議等を通して引き続き指導力の研鑽を深める努力をしていく。	B
豊かな心	道徳の授業や体験活動を通して自他の生命や人権の尊重、規律ある生活、自己の将来、きまりの意義などの理解を深める。また、様々な体験を通して自己肯定感を高めお互いに認め合う人間関係と思いやりの心を育てる。	道徳の授業や体験活動を通して自他の生命や人権の尊重、規律ある生活、自己の将来、きまりの意義などの理解を深めることができた。YPなどのアンケート結果を見ても自己肯定感が低い生徒が見受けられるが、道徳の授業では3年次に互いのいいところを認めあい、シートにまとめることもできた。	B
健やかな体	学校内外の活動に積極的に参加することを推奨したり、授業や行事、部活動等に積極的に参加すること進めることで、運動に親しむことができる生徒を育てる。また、委員会活動を通して自らの健康管理やけがの防止、安全防災について学校全体の意識を高める。	健康管理やけがの防止、安全防災等について、学校生活のいろいろな場面で、自らの健康増進を意識した行動ができた。また授業や部活動等で運動に親しみ積極的に活動する姿が見られた。さらに、委員会活動を中心に、よりよい健康管理を呼びかける活動をしていく。	B
特別支援教育	特別支援教育委員会の機能を生かし、全職員が課題のある生徒への理解を深めると共に、個別の指導計画を活用し、個に応じた指導ができるようにする。また、不登校アクションプランの作成、活用することで不登校生徒へ組織的な対応を行う。	生徒の特性に合わせた指導や高校と連携した進路指導等を行った。特別支援と不登校支援を連携させて全職員が理解を深めるため、校内共通のチェックリストや不登校アクションプランの有効な活用を推進する。	B
生徒指導	「共感」の気持ちを大事にして生徒や保護者の対応において聞くことを重視する。生徒一人ひとりに寄り添い、「誉める」「認める」ことに心がけ、生徒の自己肯定感、自己有用感の向上に努める。また他者を理解し、助け合う精神を育む。	全職員協力のもと、学校生活全般において、多くの立場や観点から生徒の活動を見守り、各家庭との連携、情報共有をもとに生徒への指導を行うことができた。面談や懇談会を利用し、保護者との関係基盤作りができていたからこそ、生きた指導になってきていることを念頭に置き、有効な準備をしていきたい。	B
キャリア教育 平和学習	キャリア教育、平和学習、等を軸に、探究的な学習に取り組ませる中で、課題発見・解決能力の育成を目指し、学び方やものの考え方を身につけさせる指導を行う。さらに多面的に自己の生き方を考えることが出来るように、教科横断的で総合的な学習も取り入れる。	キャリア教育、平和学習等を軸に、多面的に自己の生き方を考えることができるようになってきている。教科横断的にも国語・社会・理科・美術・音楽・英語等の授業では平和学習・キャリア教育が行われている。職場体験学習では課題解決の場面もあり、よい経験を積むことができていた。探究的な学習についてはやや弱い。	B
開かれた学校	学校だより等を通じ、学校の様子を保護者・地域に発信したり、定期的に学校参観の機会を設けることで同じ目線に立て話ができるような場を増やす。地域のボランティア活動への参加者をさらに増やすために、PR活動を積極的に進める。	ホームページの内容を充実した。また学校だよりなどを通じて保護者・地域に学校の様子を発信している。また、学校参観や懇談会などの場を設けて話ができる機会を設けている。委員会や昼食時の放送、担当、部活動での声掛けを行い、ボランティア活動への参加を呼びかけた。	A
いじめへの対応	「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事場面で活用する。生徒一人ひとりの状況について把握するように努め、「いじめ基本方針」をもとに、校長をリーダーに担任や各学年教諭、生徒指導専任教諭、生徒指導部からなるチームの支援を進める。	生徒一人ひとりの状況を把握するために、日常生活の見守りや寄り添い、アンケートの実施や個人面談をおこなった。また、養護教諭を含めた教員間の情報共有を密に行うなどした。問題の発生時においては「いじめ基本方針」をもとに校長をリーダーとしてチームとして対応した。	B
人材育成・ 組織運営 (働き方改革)	メンターチームを組織すると共に、報告・連絡・相談を日常化し、日々の職務の中での助言・指導を適宜行うことで若手の育成に努める。また学校の現状をしっかりと分析し、既存の職員組織の定期的な評価と見直し・改善に努める。職員室業務アシスタントの導入により各教職員の業務負担の30%削減を目指す。	経験年数が10年未満の職員を中心にメンターチームを形成した。日々の悩んでいることを共有することで、不安を解消する一助になった。職員室業務アシスタントの導入により、日常の印刷物に関して各教職員の負担を大幅に減らすことができた。既存の職員組織に関しては、職員反省を踏まえて次年度に向けて見直しを検討している。	B
ブロック内 評価後の 気付き	【確かな学力】生徒による授業評価をもとにした授業改善を行うことが、生徒に寄り添い、確かな学力をつけるのに効果的である。【キャリア教育・平和学習】教科等横断的な視点で取り組んでいる点が良い。探究的な学習に取り組むことを通じて、人から学び、多面的に自己の生き方を考えることにつながる。様々な教科学習の場面でキャリア教育・平和教育を実施し、自己の生き方を考えさせてきたことは、多面的な考え方を育むために非常に有効な手立てだと感じる。【生徒指導】実態把握と情報共有を大切にして保護者との関係を基盤に有効な指導を重ねている点が評価できる。生徒指導の中心に「共感」を置き、全教職員で生徒の活動を見守りながら、「誉める」「認める」ことで、一人ひとりの自己肯定感を高めていくとした取組が素晴らしい。また各家庭との連携・情報共有を密に行い、関係づくりを進めたところも学校運営に大きく貢献していたと思う。		
学校関係者 評価	地域防災訓練や学家連等、地域連携は進んできていると思われる。また、定期的に学校参観の機会を設けたり、地域向けに学校づくりアンケートを行ったり開かれた学校づくりの意識も感じられる。 体育祭や文化祭等地域に開かれた行事への取り組みはよく、生徒の挨拶等もしっかりしていて、教職員と生徒の関係の良さがうかがえる。		
中期取組 目標 振り返り	学校教育目標を改訂しての1年目であり、地域や生徒に「自主・自律」を定着することを進めてきた。また、「誰もが、安心して、豊かに生活できる学校」についても、随時生徒に向け発信し、言葉として定着できたと思われる。次年度以降、新学習指導要領の完全実施に向けた取り組みをさらに進めるとともに、中期学校経営計画及び、学校教育目標の具現化を図っていきたい。		